

2023年2月19日（日）／説教者：國分美生

説教：「癒されること、共同体で生きること」

聖書：マルコによる福音書2：1～12

イエスがカファルナウムのある家で人々にみ言を語っていた時、4人の人が病気の人を運んできました。当時ユダヤ社会では、病人は、神から祝福を受けていない者・見放された者とみなされたので、治療どころか共同体からはじき出されていました。病人を担いだ4人の人は、群衆に阻まれてイエスの近くに行けませんでした。群衆は、たとえ彼らに気づいていても、気にも留めていなかったのかもしれない。そこで4人の人たちは、屋根を壊してイエスの目と鼻の先に病人をつり下ろします。群衆から締め出された彼らは、病人のために、もうこうするよりほかはない、と大きな決断をし、行動したわけです。イエスの周りにいた人たちにとってはもしかすると大変迷惑な出来事だったかも知れません。ですがイエスはその人たちの信仰をみて、病人に癒しの業を行います。病気によって健康で元気な生活を奪われただけでなく、自分が生活している共同体から疎外されていた1人のために、4人の人が、何かできることをしよう、助けていただこうと懸命に行動したこと、その一連の行動をイエスは信仰、つまり信頼する心であると言ったのでしょうか。それは4人を、困っている人を助けたヒーローとして褒めたのではなく、病気の人も含め彼ら5人の関係と、思いと行動を見て「共同体とはかくあるべし」とのイエスの宣言であったでしょう。誰かのために祈り、行動すること、そしてそれが自分自身のためでもあること。共同体として共に生きる、ということはそのようなことであるのだと、イエスは言います。

イエスが行った癒しの業は、その人が再び共同体の一員として迎えられるためでした。癒された元病人は、必要なくなったはずの床をわざわざ担いでいきます。病気だったあなたの過去も携えていきなさい、ということです。病を負い、痛みや孤独を経験したからこそわかることがある、だからこそ共同体の中でできるあなたの役割がある、イエスはそう言うのではないのでしょうか。そしてまた、いつかまた病気になってこの床を使う時があるかもしれないが、それでも共同体の中で、あなたは一人の人間として尊厳を大切にされながら、これからも人々と共に生きていくであろう、というイエスの慰めではないのでしょうか。

元気があっても、なくても、安心感と共に互いの存在を喜び合い、励まし合い、賜物を生かし合い、共に神に感謝と讃美を捧げる場所、それがキリストが願った教会。そのような共同体が教会という枠を超えて、社会に、世界に大きく広がっていくことを共に祈りましょう。（國分美生）